

青年心理学における対人関係の分析*

野間教育研究所

西 平 直 喜**

(I) は し が き

この論文は、青年の対人関係を、如何に心理学的に分析するか、という問題を論じながら、同時に、青年心理学そのものの方法論的反省を意図する。

1. 嘗て、青年の書いた「両親」と題する、数百枚の作文を前にして、「この複雑多様な人間関係を、科学的に取り扱いうるであろうか？」という疑惑に呆然としたことがある。それらは、余りに、主体的、個別的、且つ偶然的であり、具体的なA—B二人の間に働く心理現象は、一回限りの歴史的個性性を持つてるように思えたからである。しかし約半月の間、作文を読んだ後、これらの人間関係も、一定の立場からは、何か法則的な機能に統合され得ると考え始め、心理学のあらゆる領域に、その立場(分析の概念)を求め、これを、まとめてみた。

[[1] pp. 9—13]

「対人関係」(Human-relationships)の追求は、必然的に、

(A) 個人内の、Psychodynamics にまで還元する方向。

(B) 社会的な、人間心理の現象として、考察する方向に別れ、

ここでも又、青年心理学が、常にとつてきた折衷主義(electicism)的に、場理論、精神分析学、学習理論、パーソナリティ諸理論、社会、性格心理的考察が用いられる。

(C) しかも、対人関係は、もつとも日常的な問題であり、根柢において、経験の人間学(I. Kant 等)の考想と関連している。

従つて、ABC三つの立場から考察を進めることとし

た。

2. 青年期の生活空間は、拡大しつつあるとは言え、成人期のそれに比べれば、なおかなり、単純で、家族・友人・異性・教師が大部分であり、特定の場合に、親戚・先輩・雇傭者が問題になる程度である。このような、外部から規定した対人関係、対象による分類を、「対人関係の種類」と呼べば、多くの青年心理学書は、「青年期の友人関係」「異性への適応」という如く、この種類によつて論を進めている。この個々の対象との対人関係を記述する位相は、i 対人関係の構造を、方法(分析の概念)によつて、再構成し、説明する位相に移行し、ii 個々の領域に関する知識によつて、青年期対人関係全般の根本的特質を究明する、より高次の立場が期待される。この立場は、「青年の感覚・青年の思考・青年の本能」(F・トレシー、野上俊夫氏)という章節から、徐々に、より統合された形で叙述されるに至つた、過去の青年心理学の歴史が示している。この論文は、多くの既刊書による知識・作文・日記を再構成し、対人関係を、方法(分析の概念)を中心として、分析し、後に、その統合と、方法論的反省に言及したものである。

(II) 青年期対人関係の方法的分析

A 個人内の心理力動性の立場

a 対人関係の強度と深度

A—B二人の間に、一定の心の紐(Rapport)が結ばれる時、場理論的に、これを力学的緊張系としてとらえれば、場の中で、どの程度に強い緊張系を持つかを、対人関係の強度と呼ぶ。外部の干渉によつて、簡単に解消する交りもあり、逆に外部の圧力によつて、我々意識(We-feeling)が強まる交りもある。青年期の対人関係は、一般に、児童期・成人期に比して、強度が高いのであるが、その背景には、青年の、成人に対する反抗・現実社会に対する不満、他の友人達に対する反撥等にもとづく強い「我々意識」を見出す。友人同士が、ノートや手紙を交換しあい、時には、符号を使つて二人だけの

* The Analysis of Human-relationships-A Methodological Design of the Psychology of Adolescence—

**by Nishihira, Naoki (Noma Institute of Education)

世界を作ろうとする傾向は、多くの作文や日記に見えている。(2) 合言葉・隠語、同じ服装は、外部との間に障壁をつくり、一種の集団への逃避となる。

しかし、強度の強さは、個人内の緊張の強さであつて直ちに二人の交りが恒常的なものであることを意味しない。強度の高い青年期の友情が、かえつて破れ易く、時に絶交という形式をとることも少くない。この友情の崩壊は、むしろ、強度(緊張)が高すぎたために、青年が、他の対人関係、自我関与と葛藤を感じて離友するのであるが、更に、青年期特有の、自己嫌悪感が背景となつていふことを見逃し得ない。自己の内部に自己に対する不快感を持つ、つまり、 $dA, -A$ (direction at A from away A) として示されるベクトルは、常に破壊的な形で、緊張を解消しようとする。いわば絶交は、青年の理想主義と、自己嫌悪感のもたらす、「取消しの機制」(Undoing) に他ならない。

対人関係は、強度と共に、パーソナリティに中心層と周辺層を考えるととき(Kretschmer, Lewin 3.)二人の関係がどの程度深い層に関係するかが問題となる。これを対人関係の深度と呼ぶ。(4)

青年には、非常に深く親との交りを持つ者もあるが、「自分の内面的な問題は、父母に殆ど話さない」とか、教師に対しても、「高校の先生はまず、われわれの生活に縁がうすい」から反抗心さえおこらないという者も多い[(5)p. 82]。一般に、青年期の友人関係の根本的特色は、交互に深い交りをする、いわば「魂と魂が触れあう」ことであり、gang-age, crowd age の、同じ目標を追求するが、集団の成員は、交互に皮相な面での交渉しか持たない対人関係と対照的である。深い層での交渉を求めるとき、自ら、人数は限定され、性格的・思想的な共鳴を求め、「理解してくれる人が一人でもほしい」と切望する。

青年が家庭の日常生活、成人達の社交辞令を嫌う傾向は、孤独の要求(一種の防禦機制)と共に、周辺的な人間関係への不満が含まれている。

「僕は家では非常に無口です。別になにという理由もないのですが、ただ馬鹿らしいような気になつて、しゃべりたくないのです。」(男子・短大生口述)という気持であり、父母、教師が、深い層での交りを持つようとしてやらない限り、多くの青年はあきたらない気持を持つであろう。

b 対人関係の動機と機制

A—B二人の交際には、ABいずれかが、なんらかの誘意性を持つことを前提とする。これを「対人関係の動機」と呼べば、この動機はB自身に対して向けられる一

次的動機(愛情・尊敬)と副次的動機(Bは物品をくれる・Bとの交際は社会的信用・賞讃をうる等)とを含んでいる。Bは嫌いであるけれども、Bと仲の良いCと交わるためには、自分もBと交わらねばならないという関係は、トポロジカルに、目標Gに到達するための通路WA, Gが、WA, Bを包摂すると表現され、児童期に比して、青年期にはかなり、このような場合が少くないのである。例えば、青年期の恋愛は、対象なき恋愛(Gegenstandloseliebe)—Spranger—と名づく可き時質を持つが、これは、現実の「誰」という異性に対してではなく異性一般への憧憬を特定個人の上に project するに過ぎず恋愛によつて自己の無力感、劣等感を安定せしめ、他の友人達からの社会的承認の要求が満たされるといふ副次的動機が強く働いている。青年は自己の内面的成長を刺戟してくれる友人・先輩・師を強く求め、Goetheに見られる如く、成長の素材としての人間関係は、発達的過渡期にある青年期対人関係の中心的動機となつていふ。かかる自己的な動機を理解し得ない限り、青年と交際することは常に失望を与えられるであろう。

「人間関係は常に意識的な動機によつて形成されるとは限らず、無意識的な mechanism によつて動かされる。これを対人関係の機制と呼ぶ。例えば、動機が全く意識されないにも拘わらず、Bに好ましさを感じる(「虫が好く」)のは、後になつて、Bの声が、幼児期に世話になつた人と似ているとか、死んだ姉と眠つきが似ている等のことに気がつくとなれば、Bに対し積極的な転嫁の機制(positive transference)を持つたと言われる。この意識的な場合は、補充的要求乃至、代償的要求(substitution)である。

以下、代償の顕著な一例を示す。

「Cは下級生であるが、年令は一才年上の異性である。私はCに崇拜的な観念を持つていた。Cは優秀生であり、同級のリーダーのみならず、校友会においても常に、リーダーとして活躍し、その頭脳の聰明さは、生徒の信頼の的であつた。(中略)

Cの性格は、温順な中に一徹な厳しさをもち、私の父と良く似ていた。当時私は父を失つた(生別)。父は子供に対して、母より厳しい中にも、深い愛情を持ち私は心から慕つていた。従つて、精神的打撃は実に大きかつた。父の思慕が、父に相似のCに何かを求めようとさせ、Cが父に代償され、Cの態度が私の心に残るようになっていた。……」(女子・短大生)

殊に両親に対する青年の感情は、権威としての父のImagoを摂取してSuper-egoを形成し、特殊のComplexを持ち、独立の要求による心理的離乳と、愛

情・承認の要求による依存とによつて、複雑な ambivalence を持つており、「機制」の考案なしに表面的な分析に終始することは許されないのである。殊に青年期の性格形成においては、「自己もあなりたい。」「自分はあはなりたくない。」「ああいう人間こそ好ましい異性だ」という Identification を中心とする幾つかの機制を重視すべきである。一、二例示する。

「私は日頃、両親に見習いたいと思う点は、多々ありますが、殊に母に多いのです。私が母の立場に立つたらあのように出来るかしらと今から気に病みます。」

(女・高生 15 才)

「……私の父が、私にとつて、この世で断然結婚したくない男の型であるとすれば、M夫人は、私のなりたくないと思つている女の型を代表していました。」

(ジッド・未完の告白)

なお、青年期の対人関係において、殊に、青年の自負・自卑と結合した Projection, Introjection, Displacement, Regression, Fixation (愛情の) 等が、多くの作文に見出された。

B 心間心理の立場

以上のような分析は、対人関係を、A個人内の心理機制にまで還元し、動的に把握することを可能ならしめた。しかし、心的エネルギーの経済的、局所的考察が進むにつれて、再び、実体的・構成的概念に逆戻りする恐れがあるとすれば、「対人関係」を強調する本来の主旨をそこなうことになる。「対人関係」は、あくまで「社会における、A—B二人の心間心理の問題としてとらえるべきである」という第二の立場が、必然的に要請されるのである。

a 対人関係の役割・技巧・枠組

社会心理学において、個人は一定の地位 (Status) を占め、一定の役割 (rôle) を果す存在とみなされる。⁽⁶⁾ 青年自らも、「自分を赤ん坊のように思つている。」「家の人みんなが、自分に依りかかっている。」等と、これを意識している。つまり彼等は、対人関係の種類とは別に、夫々心理的役割を果している。

殊に青年期の対人関係では、性的役割 (男らしさ・女らしさ) が重要な要素として働いている。友人関係においても、補充的要求により、男性的要素と女性的要素 (O. Weininger) が索引と反撥 (拮抗) を持たせ [(7) 参照]、両親との関係も、同性の親と異性の親とは、夫々異つた役割をもつて結ばれる。父親の、男らしい言葉堂々とした態度、強い性格、は、女子にとつて、直ちに同一化の対象とならず、「対照化」(1, p. 65) の機制が働

く。

青年達との座談において、もつとも顕著に気づかれる役割は、「人を笑わせる」役割である。あらゆる事態で自己の失敗を述べ、おどけることによつて、すなわち自己を過少評価させることによつて人を笑わせる道化師的とも言ふべき方法をとる者と、笑を見出し指摘するユーモリストの方法をとる者とがある。個人の果す役割が、次第に canalize された時、いわゆる二次的社会特性 (The secondary social trait) と呼ばれる反応の型ができる。(後述)これとは別に、第三者や場の圧力などによつて、一定の礼儀作法や、攻撃・親愛感の表現、虚栄心の表出が行なわれる。これを対人関係における技巧 (technique) と呼ぶ。A B Cの交りにおいて、AはBを讃めることによつて、Cを攻撃したり、C攻撃することによつて、Bとの親愛感を示したりする。又時には、B自身に軽い攻撃を加えることによつて、Bとの親愛感を示すこともある。一人の高校生は、友人の日記の中に自分の名前に「君」がついているのを発見して非常に満足している。これは日常生活の呼び捨ては、青年期 (主として男子の) 友情を表現する技巧に他ならないからである。

社会的影響を更にひろげて考察する時、A—B二人の人間関係は、封建的思想・男尊女卑の思想、特殊の階級意識などの文化的背景によつて左右されている。これを枠組 (frame of reference) と呼ぶ。閉鎖的な社会である農村と、開放的な都市とでは、自ずから対人関係も異つた意味を持ち、又男尊女卑の家風を持つ家庭に育つた青少年は、順応的にせよ反撥的にせよ、対人関係にある特殊な枠組において見る。更に枠組は、家柄や職業・貧富・父親の社会的地位等によつて影響される。前述の地位・役割と関連して、A' はB・C・D等にとつては、「常にAの妻として」対人関係を結ぶべき人となれば、A'の対人関係は、AとB・C・Dとの対人関係によつて、決定的に影響されるのである。「先生」・「後輩」・「組委員」・「幹事」等という社会的な名称は、常に個人に一定の枠組を着せるのであり、対人関係が、社会の中においてのみ行なわれ、現象する以上、『枠組』の概念は、必須といわなければならない。

旧制高校生は、特殊な枠組によつて規定され、誇りと自信と使命感を持つて生活し、又対人関係を結んだことは、周知の事実である。⁽⁸⁾ 青年の中には、対人関係において、意識的に一種の枠組 (権威) を強調する者があり「権威主義的性格」(Fromm) と呼ばれるような、他人に対する支配・服従の両極的行動をとる。

b 対人関係の基本的態度(特性)

既にふれたように、個人Aが、特定の個人Bと交わる時、当然A自身の持つ社会的特性が問題となる。これを、内的な psychodynamics に還元せず、個人の態度の特殊性として見る立場は、当然性格心理学の領域である。

この、個人の性格特性は、広義には、個人の世界観における対人関係の地位が問題となる。シュプラングー(E. Spranger⁽⁹⁾)の Lebensformen において、社会的精神作用は人間関係を中心とし、個人的精神作用の価値追求とは、「人間」の重視において全く異つたものとされ、社会的精神作用も、根本的には、「力」を追求する権力的類型は、自ら人間疎外を含み、人間そのものへの関心と愛を持つ社会的類型のみが、世界観の中心に人間を位置づける、と考えられる。なお追求する価値は未分化であるが、男子と女子、などでは、かなり人間関係の意味が異つている。この考想は、態度測定乃至職業興味テスト等によつて、計量化され、青年の職業興味に、対人的(社会的)な領域が占める地位を算定することができる。⁽¹⁰⁾

個人の対人関係は決定する性格特性として、狭義には基本的対人態度が考えられる。ホーナイ(K. [Horney])が、対人関係の基本構造として、親和的(moving toward people)・敵対的(moving against people)・離人的(moving away from people)の三態度をあげ、夫々幼児期に持った、基本的不安—無力感(helplessness)・敵愾心(hostility)・孤独感(isolation)に根ざすと主張するのは、その、最も組織だつたものと言えよう。⁽¹¹⁾

青年の作文に見出される対人関係は、この基本的対人関係に基く、依存的傾向・攻撃的傾向・内閉的・離反的傾向として、かなり明瞭に分析することが可能である。青年心理学における対人関係の類型的把握において、フロム(E. Fromm¹²⁾)の、世界及び人間(他人及び自己自身)に対する、同化作用(Assimilation)と社会化作用(Socialization)の理念型は、多くの意味で、もつとも共鳴すべき点を持つている。フロムは、生産的(pruodctive)ということ、その倫理観の中心とし、人間への愛情、理性的思考を労作的態度(working orientation)と呼んでいる。これに対し、非生産的な態度(方針)として、

(a) 受容的態度(receptive orientation)—すべてを外部から受け依存し甘える。

(b) 搾取の態度(exploiting orientation)—愛も理念もすべて外部(他人)から、力又は奸計によつて奪おうとする。

(c) 蓄積的態度(horing orientation)—外部に信用をおかず、自己の中に秩序と安定感を求めるために、すべてを蓄えようとする。

(d) 売買の態度(marketing orientatiom)—すべてを交換価値と考え、自分自身のパーソナリティまでも商品化し、「人がどう評価するか」、「いかにして魅力的になるか」が問題となる。

これらの事物・他人(及び自己)に対する態度は、masochistic, sadistic, destructive, indifferent, と夫々対応し漸次個人のパーソナリティ特性となつてゆく。

青年は、その独自性(個人差)を考えると無限に、複雑な様相を呈するが、ここでも、「類型」の概念が、その混乱を救う。ただ問題は、その類型概念が力動的であるか否かである。他の領域以上に、全体的な構造連関からの了解が要求される青年心理学は、積極的に倫理の問題を導入しようとするフロム等の考え方に、学ぶ点が多いと思う。

C 日常性の立場—経験的人間学

以上は、たとえ理論的であるにせよ、一応、科学としての心理学において、慣用され承認された考想乃至概念であるが、青年期の対人関係が、人間の存在論的問題を含み、しかも、もつとも日常的な人生の問題である以上思弁的、直観的の理由から、哲学者・文学者の思想を無視することは許されないのである。ヒュームの人性論・カントの人間学・パスカルのパンセ等をはじめ、ニーチエ・キェルケゴール・スタンダール・トルストイの諸著作は、いずれも人間関係について深い洞察を含んでいる。

若し、「人間関係」という問題の提出のしかたを許すなら、憧憬・軽蔑・嫉妬・同情・虚栄等の実用—人間学的(カント)な諸概念の使用も許さねばならない。

「……私は試験に失敗したのを発表の二日前に耳にした。その時の私は、残念だつたと思うと同時に、どうか二人(同級の友人)も落ちればよい、落ちてくれと心の中で叫ぶのだつた。……発表を見ると、二人の名前はない。『ああよかったうれしい』と心の中で叫んでしまった。涙が頬に伝つた。その瞬間、二人を憎む気持は、潮の如く引き去つてしまった。……」

(女子・短大生)

この友情の中に含まれた心理は、「嫉妬」という概念なしには、とらえることで出来ないであろう。しかも、これらの概念による記述乃至説明は、その限りにおいて科学的と称することはできないのであり、なんらかの一定の心理学的概念との対応、乃至操作的な定義をへて、

始めて心理学的に再構成されるのである。

McDougall は、人間学的概念を心理学的に再構成した第一人者であるが、彼は、「嫉妬」という対人関係に見出される現象を、「嫉妬」は、

「自分の求めた愛情の幾部分かを、対手が他人に与えた場合、又は与えたと想像する場合に生ずる。情緒の不安定な状態であり、もつとも恒常的な要素として、傷つけられた肯定的自我感情 (positive self-feeling) であり、意識に及ぼす他人の感情如何によつて、復讐と非難との両極を動揺する傾向である。」(13, P. 133—34)

と説き、「嫉妬」という人間学的な概念を、心理学的な愛の情操及び、肯定的自我感情の現象に分析している。

なお「嫉妬」は、ミード (G. H. Mead) の考えを入れて、

「他人のよりよき状態、評判・人気・名声その他、幸運をもつことに対してそれとの比較により自己価値の低落感と、相手の価値否定への動機感情として展開して来る中核的 me の二重の感情である。これには、常に他と自己との相対的關係構造が、周辺の me を通して与えられており、中核的 me の充実感情が不安動揺的であるときに著しいのである。」(14, p. 347)

とも説かれる。

対人関係の性質

このような、心理学的概念又は操作と対応せしめられた人間学的概念による分析を、対人関係の性質と呼ぶ。

筆者は、青年期の人間関係の根柢に、愛の関係 (L) と力 (S) の関係を認め、両者を操作的に (一定の態度測定項目として) 決定し、青年の両親に対する分析を試みた。父親と、母親とに対する態度の得点 (F 点, M 点) は更に、L 点と S 点との比 (L 傾向, 1, p. 100) を算定することにより、始めて、psychodynamics の問題となる。これを、 ψ 心理学的距離 (psychological-distance) として、計量化すれば、愛の次元 (Y 軸) と力の次元 (X 軸) に、一定個人の得点をプロットすること

が可能となる。愛・力の関係の自我との関係の性質を考え、愛は得点の高い程親近=接近し、力は得点の高い程敬遠・(崇高・畏敬)=遠ざかると考えれば、この愛と力の関係から、四つの組合せができ、嫉妬・反抗・軽蔑・同情・等の語は、容易に心理学的に規定することが可能である。*

(愛及び力についての作文は 1 'pp. 73—4 参照)

青年心理学は、児童心理学或は、学習心理学等と異つた方法論の上に立たなければならないが、その一つの相違は、かかる人間学的概念なしには、青年の心理を解明し了解することができない点にある。ここでは、「感激」についてのみ考察する。

「友人達の好意に、思わず泣けてしまうほどであつた。」
(男子・短大生)

「体のしびれるような感じを、その人から受けとるのだつた。」
(男子・短大生)

青年は、人間関係の中に、大きな感激を見出す。パーソナリティの深い層における交りは、当然、A—B 二人の関係を、深刻なもの、真摯なものにする。しかし、児童や成人の、比較的感ずることの少ない感激を、何故、青年はこれほど強く持つのであろうか？ 今「感激」という人間学的な概念を、心理学的に、

「一定の刺激によつて興奮が生じ、感情に強い変化を与え、価値感と結合する場合を感動と呼び、感動の中、自我の拡大感・昂揚感を伴うものを感激と呼ぶ」と定義する。*

つまり、青年期が、根本的に不安定な時期であり、無力感と劣等感を克服するために、たえず、他人からの賞讃と是認を渴望し、それがみたされた時、深い歓喜にひたり、これを自我の拡大感=感激として感ずるのである。つまり、自我感情の昂揚が、感激の前提条件でありかくして、青年が児童・成人より、男子が女子より (女子にはより感動が多くみられる)、感激性に富むのであり、青年期の対人関係の重要な一要素となつていのである。

* 愛及び力の関係は、作文を読みつつ、筆者が考案した二要素であるが、Spranger, (9) Murphy, (11) Symonds, (16) Fitz-Simonds (16) も、同様二元的な考えをしていることを後に知つた。なお、人間関係を愛憎と、自負—自卑との二元的にとらえた最初の人、ヒューム (人性論) だと言われている。パスカルも、「尊敬と愛情とは極めてよくつりあつてい、尊敬が愛情を打消さないようにして、互に支えあつていなければならない。」(愛の情念に関する説(60))と言つていこと等からして、必ずしも、この二元的な考え方は常識からかけはなれたものとは思われない。ただ現実生活の実例について、両者を峻別することは困難である。

** 学生の書いた、「感激の体験」は、感動と感激の両者を含んでいるが、両者は、やや異なると思う。「入学試験に合格した。」「試合に優勝して母校にかえつた時。」「教えていた子供達が、自分のために泣いてくれた。」等は、他人が自己を認め、賞讃してくれることによつて、自我の拡大感を覚えるのである。十八才の無名の学生ロマン・ロランが、世界的文豪トルストイに自己の悩みを訴え、三十八頁に亘る返信をうけた時の感激をその自伝 (「内面の旅路」) にしるしているのはもつとも良い例である。

(Ⅲ) 青年心理学の方法論的反省

(対人関係の分析を中心として)

a 記述と説明

記述は自ら説明を含み、説明も亦、記述によるのであり、記述と説明は、実際問題として峻別することはできない。しかし、現に青年はどんな交友関係を持っているか、青年は父及び母に、どの程度好悪を感じているか、という命題を出し、これを質問紙(態度測定)で調べたとすれば、それは、材料蒐集の統計的操作であり、「大量観察」を求める実態調査として、記述を主とする結果が得られるであろう。例えば、(1)両親に対する態度を一定の操作をへて計量化し、F点(父)M点(母)として示せば、これは、現に、ある地域の、ある階層の青年達は、両親にどのような態度を持っているかを記述する資料を与える。これに対し、人間関係に、愛及び力の二関係を考え、男子・女子・又はある特定の青年が、どのような愛(L点)と力(S点)の関係を持つかを計量化するなら、記述はより力動的となり、その対人関係の構造を明らかにする(説明する)ことも望み得る。「あの青年は、何故家出をしたか」という問いは、家族との対人関係を、彼の内的心理過程と結びつけ、説明的になった時に、答えられる。

既に述べた如く、対象(対人関係の種類)を丹心として論を進めると、いきおい記述を中心とする形となり、方法を中心として論を進めるなら、説明に重点をおく青年心理学ができる。質問紙法も、態度も測定も、意識的に、記述的な面を求めるか、説明的な面を求めるかによって、問題構成の立場や、粗点に対する解釈は、自ら異なったものとなるであろう。青年心理学は、説明の面を、もつと強調してよいのではないかと思う。しかし、いう迄もなく、記述がある程度なされた後に、始めて説明が可能になるのであり、又説明は、次の段階の記述になるものであり、両者は交互に、弁証法的にとられるべき立場である。

b 実証性

科学であることの一条件は、その実証性にかかっている。勿論、多くの、青年によつて書かれた日記・作文・伝記等が、ある命題の実証とはなるであろう。

「実際にはそんなでもないのに、自分は丈が低いという劣等感に何時も悩まされている」(女子・高校生)
「その人(異性)のすることはすべて理想的で、その人の持っている性質は、すべてすばらしく思えました。」(男子・短大生)

この二つの手記から、「青年は仮空の劣等感を持つて

いる」。「青年は異性を実際以上に過大評価する。結晶作用が働く。」という命題を出す。これらの資料は、たつた一例であつても、記述の資料であると共に、ある程度、命題の実証性を持つている。小説や伝記の引例や分析は、かなり意味を持つものである。

しかし、このような特殊の例は、

「女子高校の頃、私にはすべての男性がけがらわしい下品なものに思えた。」(女子・短大生)

という別の例によつて、全く逆の命題が成立する可能性も含んでいる。

青年心理学の論述は、「文学的な感じ」を与え、客観的な確実性が乏しいと評されるのは、一般に、計量化による検証が不足しているためと思われる。青年心理学の領域では、実験室的な厳密な条件分析や計量化は期待し得ず、一定の限界はあるとしても、Sociogram, social-distance の測定、男女共学制群と非共学制群との異性観の相違(大西氏)、劣等感の理論値と観察値の差異(筆者)、等、二群の比較として、仮説演繹的な、命題の検証を目的とする調査が、もつと採用されねばならない。両親との関係を、反抗・心理的離乳として記述することと共に、家庭における Frustration が、両親に対する態度とどのような関係にあるかを、一定の操作(F点・M点と Frustration の点との相関・乃至分散分析)を通して、実証的に論ずることが要求されるのである。この実証のためにも、記述的な立場を、より高次の記述(説明)的な立場にする必要がある。」

c 青年性格心理学(統一の立場と将来の展望)

青年心理学が、対人関係を上述の如く分析するなら、「各学説・概念を、『青年』に当はめたものに過ぎないのではなからうか?」という疑問が生ずるであろう。しかし、なんらかの根本的立場に統一された時、折衷主義は、もつとも公平な妥当性を持つ知識体系を与える。多くの青年心理学は、「青年」という、児童・成人等の関係概念を媒介として始めて成立する、一種の発達概念を含む通り、「感情の発達・知能の発達・社会性の発達」等、『発達』という視点に統合されている。〔17〕はわが邦の青年についての豊富な基礎資料を「発達」的に統合したもつとも新しいものと思う。今これらを、「青年発達心理学」と呼ぶなら、個々の青年を比較論述する「青年差異心理学」が可能となる。「女子青年心理学」(津留氏)や、農村青年の研究、内向性青年の研究は後者に属するのである。兎に角、統一の立場・問題意識が明瞭になる程、その青年心理学書から、元型的・本質的な知識を期待し得ると言えよう。

筆者は、青年の心理現象(劣等感・感激性・対人関係・

自殺等)の構造を解明し、その性格形成過程を分析せんとする青年心理学の一領域を考想し、仮に、「青年性格心理学」と呼んでいる。

「青年」という縦断面的な発達概念と、「性格」という横断面的な類型概念とを含む以上、「青年性格心理学」はそれ自体、一種の矛盾概念であることを自覚せざるを得ない。ここでは、常に、「何故彼は、そのような言動をとつたか?」「何故、その青年は、そのような性格を形成するに至つたか?」という質問によつて、すべての事象を統合しようとする。例えば、上述の対人関係の分析は、窮極に、対人関係の類型的把握と、その形成過程の説明に関係づけられるのである。

「性格」を中心として青年を考えると、青年は、矛盾を持つもの・自己矛盾によつて発展するもの・常に独自の性格形成の過程にあるものとして考えられ、その完成した形では、 $\times$ 時間の空間化 $\times$ (Bergson) に似た誤りを犯さぬよう、「青年の幾何学」ではなくして、「青年の力学」が望まれ、そこでは、青年の生き方についての、実存的な命題をも問題とすることが可能になると信ずる

要 約

青年心理学における対人関係の分析は、¹ 対象(種類)を中心として、及び² 方法(分析の概念)を中心として考察されるが、前者は、いきおい記述に、後者は説明に重点をおく。又各個々領域の対人関係を再構成することによつて、青年期対人関係の基本的特質を究明し得る。この論文は、方法を中心とし、対人関係全般を分析した。

分析の立場及び概念を列挙すれば次の通りである。

- A 個人内の心理力動性の立場
 - 対人関係の強度・深度(場理論を主として)
 - 対人関係の動機・機制(精神分析理論を主として)
- B 心間心理の立場
 - 対人関係の役割・技巧・枠組(社会心理的)
 - 対人関係の基本的態度(特性)(性格心理的)
- C 日常性の立場
 - 対人関係の性質(経験的人間学)

夫々の立場を、青年の作文等の引例により分析し、そ

の対人関係の背景として、青年の生活空間の構造・独立・承認の要求・憧憬・劣等感・自己嫌悪・感激性等を考察し、これらを、「青年性格心理学」という立場により統合しようとする試論であり、且基本的な立場の解明を期したものである。

いう迄もなく、この「説明」の立場は、次の発達段階の記述の役割を果し、再び止揚されるべき面を持つてゐる。

引 用 文 献

1. 西平直喜：「青年一両親関係」の心理学的研究 (野間教育研究所紀要 第7輯)
2. シモーヌ・ドボーヴォアール：第二の性(「新潮」49巻 12号)
3. Lewin, K. : Some Social-Psychological Differences between the United States and Germany. (Character & Personality Vol. 4, 1936)
4. $\times \times$: Principle of Topological Psychology, 1936
5. 依田新：青年の心理. 培風館. 昭 25
6. Linton, R. : Role and Status in Readings in Social Psychology 1947, ed. by Newcomb & Hartley.
7. 牛島義友：女子の心理 巖松堂 昭 21
8. 岡本重雄：若き日の自我像羽田書店
9. Spranger, E. : Lebensformen (辻幸三郎訳「生の形式」)
10. 藤原喜悦：職業興味テスト 金子書房
11. Horney, K. : Our Inner Conflict. 1945
12. Fromm, E. : Man for Himself. 1947
13. McDougall, W. : An Introduction to Social Psychology 1921
14. 正木正：行動の心理, 河出書房. 昭19
15. Murphy, G. et al ; Experimental Social Psychology 1937
16. Symonds, P.M. : The Psychology of Parent-Child Relationships. 1939
17. 教師養成研究会：青年心理学 昭 27